慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一角獣研究 II : 江戸期の一角獣表象
Sub Title	Einhorn-Studien II : Japanische Vorstellungen über das Einhorn in der Edo-Ära
Author	和泉, 雅人(Izumi, Masato)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.122(325)- 137(310)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一角獣研究　Ⅱ

——江戸期の一角獣表象——

和　泉　雅　人

ヨーロッパ系の一角獣伝承の主要モチーフである乙女による一角獣の誘惑・捕獲という説話系は「一角獣研究Ⅰ」において論じたごとく[1]、その淵源をメソポタミアのギルガメシュ叙事詩に有し、さらに古代インドに変遷し、マハーバーラタ叙事詩及び仏教説話を通じて東西両洋に伝播したものと推定される。そしてその伝播の東端が日本である。

日本においては中国経由の仏典等による移入が恐らくは最も初期のものであろう。『大智度論』経由で流入してきたリシュヤシュリンガ・モチーフは『今昔物語』において日本に定着し、それ以来日本文学のなかで主に一角仙人表象としてその展開を見てきた。『今昔物語』天竺部巻第五の「一角仙人、女人ヲ負ハレ山ヨリ王城ニ来レル語」の章とその次に置かれる「国王、山に入リテ鹿ヲ狩リ、鹿母夫人ヲ見テ后トセル語」の章がインドのマハーバーラタ叙事詩中のリシュヤシュリンガ伝説の主要モチーフに対応している。それらの対応関係については他の諸研究において明らかであるので、ここでは省略し、それとパラレルな関係にある日本における「一角獣」受容の様相を検討してみたい。

Ⅰ

日本は言ってみればあらゆる一角獣伝承伝播の東端であり、従って西洋世界との直接的接触が行われた江戸期という時間断面で区切ってみると、そこにはインド系、中国系、ヨーロッパ系の伝説素が混淆するという様相が観察される。中国系は専ら麒麟伝承として定着しており、本稿では取り

扱わない。またインド系は二つに分類される。マハーバーラタ系と疑似インド系である。マハーバーラタ系は一角仙人伝承として、日本においてその芸術的展開を見ている。われわれの問題とするのは疑似インド系の伝承である。それが「疑似」であるのは、その伝承の出所が各文献に記述されているようにインドであるかどうか疑わしいからである。「疑似」というのは従って本稿の場合、事実認識ではなく保留としての仮称の意である。

ヨーロッパ系伝承はオランダ交易および中国交易の結果もたらされたものであり、それは長崎通詞を介して流入したものと、本草学に関する書籍を通じて入ってきたものとの二種類に分類される。現在までの調査では本草学による伝承の方が早期である。やはり薬物の伝播力には相当強力なものがあるといえるだろう。そして一角獣は専らその角の薬物性が江戸期の日本で受容されていくことになるのである。一方、長崎通詞による情報も概ね、一角獣の角の薬物性を指向している。

もとより、一角獣というのはその角が薬として珍重されたところから、日本においてその名が知られるようになったものである。その源流は恐らくオランダ船などが一角獣の角の「実物」を献上品などとして日本に持ちきたったところに発するのであろう。そしてその情報と本草学の在来の情報とが交差した形となって、一般に流布していったのではないかと推測される。この推測の根拠の一端は『和漢三才図会』〔正徳二年、1712年〕一角の項の冒頭の記述である。「按、宇無加布留、俗用一角二字、阿蘭陀市舶偶來而爲官物、尋常難得」そしてこの時点において、現階段で最古の文献と考えられる『本艸辯疑』の記述が知られていたことを考慮するなら、上記の推測も大きく外れたものではないと言えるだろう。

『和漢三才図会』の図の解説において「あるいは犀の角か」という記述が見られるところから、この時点では海獣「イッカク」の角であることは日本で未だ一般には知られてはいないことがわかる。いわゆる「ウニカフル」なるものが海獣「イッカク」の角であることが確定されるのは、1785年の『一角纂考』においてである。そしてこれもまたヨーロッパの地理書から得た情報である。そのヨーロッパにおいてはすでに十七世紀におい

て、陸悽の一角獣の存在は否定されており、またその万能薬としての効能も、迷信的なものは別として、否定されているものである。筆者の知るかぎり、もう一つの側面である強精剤としての一角は、その存在が充分予想されるところではあるが、未だ確認されていない。

いずれにせよ、一角仙人の伝承系と並んで、オランダ・中国渡来の一角獣表象が江戸期に到り、一般化していったことは疑いをいれないであろう。加えて、中国の麒麟伝承系が存在し、日本には三種の並列的な一角獣表象が保持されるという希有な現象がここには観察されるのである。これには日本の地理的、従って、文化的位置が本質的な役割を果たしていることはいうまでもない。極東に到って、あらゆる種類の一角獣表象がその終着点を見出したのである。

Ⅱ

以下時代順に受容の様相を検討していくことにする。一角仙人の受容とパラレルな関係にある一角獣そのものの受容の源流を突き止めることはきわめて困難なことであるが、しかし現段階の調査では次に述べる『本艸辨疑』〔1681年、天和元年〕が最古のものである。(2)

> 番語、一ヲウントト云ヒ、角ヲカフルト云フ、此獣一頭一角アル故ニ名トス、犀数千年ニシテ變ジテウンカフルトナリ、皆龜甲ノ如ク頭ニ一角アリ、山ニ砒石アリテ毒谷川ニ流レ出ヅ、鳥獣此ノ水ヲ呑ンデ皆死ス、一角此ノ川ニ入テ身ヲ洗ヒ、水ヲ呑ムト云ヘドモ不死、鳥獣一角ノ毒ヲ解スルコトヲ知リテ、同ク水ニ入テノミ身ヲ洗フト云傳フ、毒ヲ解スルノ能犀角ニ同ジ、白犀角ト異ナルコトナシ、故ニ姦商住々ニ白犀角ヲ偽リ充ツ、但犀角ハ澤ナク短ク、一角ハ澤有リテ長シ、(3)

紀元前400年頃のギリシャの医者クニドスのクテシアスの『インド誌』によれば、インドには一角の野生のロバがおり、その角で作った杯で飲む者は発作にも癲癇にもかからず、また毒にもあたらないという。(4) そしてこの角の解毒作用が一角獣の最も求められる特徴となったのである。それ

は古代ローマ時代のアエリエヌスにも引き継がれていく。[5] しかしいずれにせよ古代の記述では角の解毒作用が強調され、『本艸辨疑』で述べられているような毒水を一角獣が浄化するという説話素は登場していない。それが初めて登場するのは紀元後200年頃アレクサンドリアで成立したものと推定されている『フィジオログス』である。その後段においては、次のように描写されている。

> 一角の獣が存在し、その名もまた一角獣である。ところでかの地において大きな湖があり、そこには野獣たちが水を飲みに集まってくる。しかしながら、獣たちが集まる前に、蛇が〔湖に〕這い寄り、毒を水にのなかに吐いた。さて獣たちは毒の存在を感じ取ったので、水を飲もうとはしなかった。つまり獣たちは一角獣を待ったのである。そして一角獣がやって来ると、それはまっすぐに水のなかに突き進み、その一角で十字を〔水のなかで〕切った。それによって毒の力は消えた。そして一角獣が水を飲んだので、他の獣たちもまた皆水を飲んだのであった。[6]

『本艸辨疑』では山の砒石が毒を流すことになっており、蛇ではないものの、まず一角獣が水を浄化してから、鳥獣が水を飲むなどというモチーフは同じである。つまり〔悪しき者＝砒石〕〔毒〕〔水〕〔一角獣の解毒〕という常数項は保持されており、以下に続く江戸期文献においても同じである。現段階の調査によれば、この『本艸辨疑』が時代的には最も初期のものであり、これ以降の文献においても上記の常数は変化しないことから、江戸期の一角獣文献の源流として本文献を位置づけたい誘惑にかられる。しかし『本艸辨疑』自体が海外の情報に基づいた二次的情報であることを考慮すれば、上記の仮説も相当の留保の上主張されねばならないだろう。さらに注目すべきは一角獣のロマンス語的解説である。これもまた『辨疑』以後の文献において頻繁に繰り返される情報である。さらに一角獣の角の贋物についての記述も興味深い。ただこれが当時の日本の実態について述べているものかどうかは不明である。『本艸辨疑』が基礎としている

情報がヨーロッパ系のものであれば、当時の西洋世界で常識と化しつつあった「贋物の一角」についての情報もまた『本艸辨疑』が受け入れているものと推測されるからである。

『本艸辨疑』に続くのは『華夷通商考』〔1695年、元禄八年〕である。

> 獨角獸、此國深山ノ河水ニ毒虫多シ、諸ノ獸敢テ先ニ飲ム事ナシ、ウンコウル來其角ヲ以テ河水ヲ攪キマゼテ飲ミテ後、諸獸皆飲之ト[7]ゾ

『本艸辨疑』の記載と酷似しているが、ここでは場所がインドに特定され、また『本艸辨疑』では一角獸が川のなかで身を洗うことになっているのに対し、ここでは角で水を攪きまぜることになっており、また砒石が毒虫に変化している。これがいわゆる変数項的説話素に属しているための結果であるのか否かは確定が困難なところである。しかし、クテシアス以来、ヨーロッパ系一角獸の解毒方法が角による水の攪拌であることを想起するなら、『華夷通商考』は『本艸辨疑』とは別種の一次情報に基づいている可能性が高いのではないだろうか。

十八世紀に入ると1712年〔正徳二年〕の『和漢三才図会』、1713年〔正徳三年〕新井白石の『采覽異言』と続く。これら両者とも解毒作用については直接的には触れておらず[8]、科学的にその形状を記述するに留まっている。それまで一角獸の角が陸棲の動物に由来するものか、海獸に由来するものかについては明確な情報が欠如していたのだが、特に『采覽異言』において白石はグリーンランド産の海獸のものではないかという旨、言及している。「又有海獸。形如馬。而有一角。[9]」「形如馬」という記述はあるものの、恐らくこれが日本で最初になされた一角獸の角に関する科学的な証言であろう。

水の解毒という一角獸のイメージは、再び近松門左衛門の『平家女護島』〔1719年、享保四年〕のなかにも登場している。

> 彼唐土の獨角獸といふ獸は、水上の悪毒をおのれが角にてそゝぎ消し、國民の

命をたすく共、獵師は恩をわきまへず、獨角獣を殺して角を取、是頼朝めに相同じ[10]

『フィジオログス』との記述の一致は『本艸辨疑』などに見られるほどではないが、その主要部分は同根であろう。「唐土」とあるが、それは文字通り中国を意味するものではないのは明らかである。しかし、近松がどこからこの情報を得ていたのかは不明である。

このころ中国から『坤輿外紀』が流入し、1734年日本で初めて引用されている。『坤輿外紀』の著者は南懐仁ことフェルディナンド＝フェルビーストである。つまりヨーロッパ人による記述であるから、その情報は一角獣に関して流伝による偏差を被る可能性が低い。『坤輿外紀』には『獨角獣』の項と『巨鳥異獣』の項に一角獣についての記述がある。それぞれ興味深い記述であるが、これまでの日本における受容に関連すると思われるのは恐らく『巨鳥異獣』の方であろう。

其地多毒蛇、泉水染其毒、人畜飲之即死、有獣、名独角、毎日以角攪、其水人畜鳥獣方敢飲[11]

ここで興味深いのは毒の主体が虫ではなく蛇になっていることである。既に見たように『フィジオログス』においてはそれは蛇であり、同書に始まるヨーロッパの伝統的表象がこれによってようやく日本にまで到達したことになる。次に『獨角獣』の項を見てみよう。

印度國産獨角獣、形大如馬極輕快、毛色黄、頭有角、長四五尺、其色明作飲器、能解百毒、其鋭能觸大獅、若惧觸樹角不能出反為獅斃[12]

この記述では興味深い点が二つある。一つは角で「飲器」を作るということであり、いま一つはライオンとの関係である。ヨーロッパ系最古の文献であるクテシアスの『インド誌』[13]、あるいはその流れを汲むアエリアヌ

スの『動物論』[14]にもまず「杯」としての一角獣の角の効用が言及されている。またヨーロッパの俗信によれば、一角獣の天敵は象ともいわれ、ライオンとも言われている。ところがこれらの情報は『フィジオログス』には欠けているものであり、また『フィジオログス』に含まれる有名な「乙女による誘惑」の記述もここでは言及されていない。このことから恐らくはフェルビーストは幾つかの典拠によっていたのではないかという推測も成立するのである。

『喪志編』〔1749年、寛延二年〕の記述は『華夷通商考』とほぼ完全に一致している。[15]ところが次の『廣大和本草』〔1755年、宝暦5〕には角の真贋を判定する、ヨーロッパでも有名な方法が初めて言及されている。

> 阿蘭陀國欠奴蘇奴ガ傳ニ云ク、無灰酒中ニ浸スコト一宿、其酒水ニ變ズル者ヲ以テ眞物トス[16]

『牛馬問』〔1756年、宝暦六年刊〕では「うにかうるとは、角の惣名と志るべし」など、「ウニカウル」の語義を詮索しているが、結論は誤っている。[17]

1766年の『昆陽漫録』に到り、ようやく「乙女による誘惑」のモチーフが、わずか一行ではあるが、登場してくる。「一角獣女児ヲ好ミ、香ヲ悦ブ。」[18]がそれである。

つまりメソポタミアのギルガメシュ叙事詩から発した「乙女による一角獣の誘惑」というモチーフが、インド・地中海・オランダを経由して、ようやく日本に到達したということである。インド・中国を経由して、一角仙人という形象をとって、今昔物語のなかに結晶化している同じモチーフがこの約600年以前に渡来していることを考えると、感慨深いものがある。しかしながら、同根であるとはいえ一角仙人のモチーフとは異なり、一角獣のモチーフは日本では何の展開も見なかった。古代ギリシャ・ローマの一角獣表象が主に文献によって、即ち、図像的証言の欠落した伝承形態によって支えられていたことに呼応しているといえるだろ

う。一角獣の日本における図像表現は、現在筆者の知る限り、稚拙な図表等を別にすれば、なんら中世期ヨーロッパのあの華麗で気品に満ちた芸術的表現には到達しなかったのである。その原因は中世ヨーロッパにおける一角獣のキリスト教との深い象徴的関係に求めることができるのかもしれない。つまり一角獣がイエス・キリストと象徴的レヴェルにおいて同定的存在であったことにより、その表象・表現型が強力な宗教的・芸術的展開を見せることが可能であったのである。一方の日本では専ら、医薬品として一角獣が、正確にいえば、その角の薬品としての表象が先行したのであった。

日本の場合、一角仙人のモチーフが主流であり、また源流であり、その他の一角獣モチーフはインド、中近東から直接的にではなく、ブーメラン的にヨーロッパから、あるいは中国などを経由してもたらされたものである。そしてその情報には既に一角獣の存在についての神秘的な側面が欠如しており、その代替情報として科学的な角の出所探究の結果が優先的に受容され、しかし迷信的な側面の一部である医薬的効果への信仰は残存し、明治期に到るまでその解毒効果が信用されていたのである。これと並んで、一角仙人のモチーフが文学的、芸術的に成熟していくためには数世紀を要したことを考慮するなら、たかだか十七世紀以来の受容である獣としての一角獣が、日本においては芸術的な開花を見なかったとしても、不思議とするにはあたらないのかもしれない。

1774年〔安永三年〕の『瓊浦偶筆』では一字一句にいたるまで『華夷通商考』『喪志編』の記載を踏襲している。[19] 1778年〔安永七年〕『契情買虎之巻』では珍しく一角で作られた花器が登場する。[20] 1779年〔安永八年〕の『居行子』後編は殆ど『采覽異言』の繰り返しであり、[21] 1781－1783年〔天明元年－三年〕の『安齋随筆』でもウニコウルの名称の解説と『采覽異言』の引用が行われている。[22]

1786年にはしかし、『一角纂考』と『六物新誌』の両書が登場する。『六物新誌』には後に『魚鑑』において受け入れられることになる海獣イッカクと船の衝突という興味深い話が掲載されている。[23] またその附考におい

て、ウニコウルを四種に分類し、解説を加えており、その叙述の科学性は高い。[24]

他方、『一角纂考』は日本における一角獣学の集大成の観がある。これほど徹底したウニコウルに関する記述が以後の文献において引用されることが少ないのは、つとにその名が知られていなかったためであろう。そして以後の文献において引用されている情報自体『一角纂考』の域を出るものはごく僅かである。著者木村孔恭はそれまでの一角獣に関する文献を博捜してこれを批判的に検討している。ただ、孔恭は一角獣の角とは実は海獣イッカクの角であるという前提から出発しているため、一角獣そのものの伝説的存在意義が全く理解できないでいる。さらには文献批判の点で、自らの情報源がヨーロッパのものであることを閉却し、「此伝聞蛮人之設而記之者也」[25]として、他の文献を斥けていることは公正さを欠くものであろう。

いずれにせよ、この両書によって、一角獣の角とされ一般においてその効能が信じられてきたのは、海獣のイッカクの角〔歯〕であることが明確にされたことは大きな功績であった。

Ⅲ

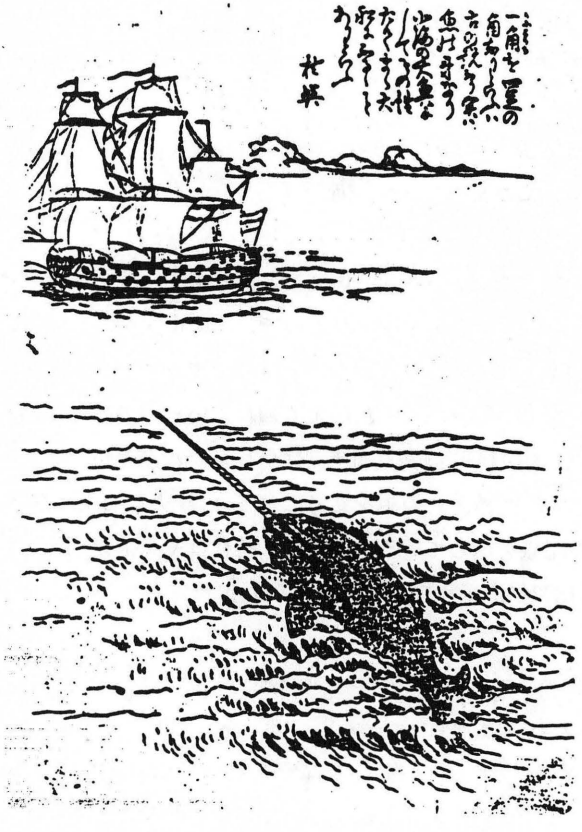
十九世紀に入るとほぼそれまで流入してきた情報の反復が行われ、新たなものは付加されていない。『一角纂考』成立の時点において、重要な情報は出揃っていたということである。

『秋苑日渉』〔1807年、文化四年〕は『坤輿外記』『本草綱目』の記述を引用し[26]、『柳葊随筆』〔1820年、文政三年〕は『訓蒙圖會』『魚譜』を根拠として、一角魚の形状を述べるにとどまっている[27]。しかし1831年〔天保二年〕の『魚鑑』において、日本では珍しい情報が付加される。

> この魚の大サ四丈餘より七八丈に及び、その角ハ上腭にありて、長さ八九尺より一丈五六尺、その末甚するどなり、よく蠻舶の鉄壁の如きをも貫くといふ、此方にも似ことあり、一船佐渡の海にて風と舶うごかず、時に舶底に、こたへ

て、ものゝ折る响(ひじき)ありて、行こと前の如し、後舶底を閲るに、角の如く長サ三四尺斗のもの、貫き残れり、取て識者に見せしに、これ一角(うにこうる)なりといゝしぞ、また古説に、馬の頭、牛の蹄、にして一角ある獣、これなりといふは、真説には非す、詳に六物新志にあり(28)

武井周作のこの著書において興味深いのは、「ウニコウル」というのが海獣「イッカク」のことであるとして、明確に定義していることではない。また、「イッカク」の角が船底に突き刺さり、そのため船が止まってしまったという報告でもない。それは武井も述べているように、『六物新志』



『魚鑑』巻頭口絵（関場武氏所蔵本）

において既に言及されている。そうではなく、恐らくはこの報告をもとにしてであろうが、この書には珍しい南蛮船に向かうイッカクの図が付されていることである。図像的伝承としては数えるほどしかない一角獣やイッカクの貴重な例であるといえるだろう。〔付図参照〕

そしてさらに面白いことには、ウニコウルというのが陸棲の一角獣のことであるというのは「真説には非す」として否定されていることである。つまりここでは本来、一角獣を指示する名称であったウニコウルが、完全にその贋物である「イッカク」の名称として定着してしまっていることが示されているのである。この逆転現象は全く興味深いものがある。江戸期において大量の贋の一角獣の角、即ちイッカクの歯が出回っていたことの間接的な証左でもある。このことを別のアスペクトから間接的に証言しているのが川柳である。

踊り子の話大きなうにこうる
持参金うにこうるまで飲んだ面[29]

橘町の大阪屋平六から「一角丸」と称して売られていたのは勿論「イッカク」の長く延びた歯を削ったもので、主に解毒剤として売られていた。川柳大辞典によれば、うにこうると言えば嘘の代名詞でもあったというが、上記の川柳二首にもそれがよく顕れているのではないだろうか。

1843年〔天保14年〕『筠庭雑考』はウニコウルは海魚であるとはっきり述べ、更に『坤輿外記』の説を参考にして、「紅夷も旧説は獣としたるにや」と科学的認識を示している。[30] 最後に、時代はやや前後するが、『本草綱目啓蒙』〔1803年、享和三年〕を見てみよう。

蛇角　ウニコール　　ウニコールハ刺的印語ウニス〔一〕コルニユ〔角〕ノ轉タルナリ、紅毛語ニハエーン〔一〕ホールン〔角〕ト云フ、皆一角ト云義ナリ、故ニ本邦ニテモ一角ト書ス、此品蠻産ニシテ唐山ノ人ソノ實ヲ知ラズ、蠻人將來ノモノアレバ誤認テ大蛇ノ角トス、因テ此書ニモ蛇角ト出ス、寶暦二年唐山

ヨリ將來スルコトアリ、龍角ト名ヲ書セリ、蠻書ニ、古説ハ獸角トシ今ノ説ハ魚齒トスト云、獸角ノ説ハ坤輿外記ニ、印度國産獨角獸形大如馬極輕快毛色黄頭有角長四五尺其色明作飲器能解百毒其鋭能觸大獅若惧觸樹角不能出反為獅斃ト云モノナリ、魚齒ノ説ハ今多ク渡ル　グルウンランドノ魚齒ナリ、長サ八九尺、外ニ斜紋アリ内ニ空アリ、切レバ皮肉ノ隔ニユキワアリ、今僞ルモノ多シ、鯨齒ヲ薄ク斜ニ切テ外ニ斜紋ヲ刻メリ、代用テソノ効ハ遠カラズト云フ[31]

『本草綱目啓蒙』は本草学的情報の終着点という印象を与える。そして今まで検討してきた情報の殆ど全てがここに出揃っている。著者小野蘭山の「蛇角〔別名、骨咄犀〕は一角のことである。」という指摘は既に『一角纂考』において行われているものである。しかし、一角獸に関する説話素、即ち『本艸辨疑』において最初に言及され、日本に導入された〔悪しき者〕〔毒〕〔水〕〔一角獸〕という系列は、この書の性質から言って当然のことかも知れないが、全て欠落している。

Ⅳ

このように江戸期の一角獸表象を概観して見ると、各記述の中心に据えられているのは角のもつ解毒作用であることが明らかになった。その他のものとしては、角の形状や角の出所についての考察が見られた。角の由来についての考察の中心にあるのはそれが陸棲のものか海棲のものかということであり、外来の情報に基づいてイッカクの歯であると結論している。いずれにせよ、江戸期の表象はすべて外来の情報によって成立しているのである。最も詳細を究めている『一角纂考』でさえ、外来の情報を外来の情報によって批判しているに過ぎない。その意味では本格的な一角獸研究は全く存在していないといっていいだろう。それと並列的に観察されるのは、獸としての一角獸を基本とする言語的・図像的芸術表現も全く存在していないということである。従って、一角獸に関しては、その角の解毒作用という実用的側面だけが受容されてきたと結論してもいいだろう。

そして解毒作用については、おおむねヨーロッパ系の伝承が中央アジ

ア・南海航路を経由して渡ってきたものであろうと推測されるが、他方ではマハーバーラタ叙事詩中のリシュヤシュリンガによる早魃の解消、遠くはギルガメシュ叙事詩中のエンキドゥによるギルガメシュ暴虐の排除など、ウラジミール・プロップの形式的説話理論でいうところの「困難・災難・災悪の解消」の行為が基礎的な構図を描いているものとも考えられるのである。(32) ちなみに『フィジオログス』における一角獣の解毒行為そのものも、言ってみれば、この理論的構図の域を大きくでるものではないのではないか。但し、クテシアスの『インド誌』において述べられている記述が、いささかの信憑性を含むものであるのなら、言い換えれば、実際にはインドに足を踏み入れたことのない彼がペルシャ宮廷で聞き集めた情報のなかにある「解毒作用のある角をもったインドの野性のロバ」という情報そのものが、彼の創作でないかぎり、一角獣の角の解毒作用はインドに発祥する伝承である可能性も否定できないのである。

注

1) 和泉雅人「一角獣研究Ⅰ」藝文研究、第57号、1990、211～195頁
2) 本来であれば、李時珍の『本草綱目』が1607年、慶長十二年に渡来してきているので、これを最古の情報源とすべきではあるが、同書には一角獣の名もイッカクの名も見えず、時珍はこれを蛇角として紹介している。また、その形状と薬効のみを記述し、一角獣との関連性はようやく後世になって認識されることになる。
3) 遠藤元理『本艸辨疑』五の九、天和元年〔1681年〕〔物集高見『広文庫』第三冊、大正五年、594頁〕
4) Ktesias aus Knidos: Indika. zit. nach Jochen Hörisch: Das Tier, das es nicht gibt. (Greno) 1986, S. 22.
5) Aelianus, Claudius: De natura animalium. zit. nach ebd. S. 39.
6) Physiologus. zit. nach ebd. S. 43.
7) 西川如見『華夷通商考』元禄八年刊〔1695年〕〔物集高見『広文庫』第三冊、大正五年、595頁〕
8) 『采覽異言』には、「入薬神験勝於犀角」とあるから間接的には言及している。新井白石『采覽異言』正徳三年〔1713年〕〔新井白石全集、第四巻、昭和五十二年、826頁〕「グルウンランデヤ　地最荒闊。南阻歐邏巴北海。北接亞

墨利加北界。東西知其所極也。〔中略〕又有海獸形如馬、而有一角、往々拾得其退角、大至七八斤、入藥神驗勝於犀角、名曰ウンコル、方語ウン。一也。コル。角也。」

寺島良安編『和漢三才図会』巻三十八、正徳二年〔1712年〕〔日本随筆大成刊行会、昭和四年、582頁〕「按、宇無加布留、俗用一角二字、阿蘭陀市舶偶來而爲官物、尋常難得、其長六七尺、周三四寸、色似象牙而微黄、外面有筋、畺々如竿麩、至末一二尺細尖、而筋亦無之、微曲斜也、内有空穴、其穴徑四分許、價最貴、故以白犀角充之、其白犀角從交趾來、近年是亦希也、其色白不潤、長者尺餘、破之如竹、有禾理、外面無筋、見其全躰、則大異矣、」

9) 同上

10) 近松門左衛門『平家女護島』享保四年〔1719年〕〔近松門左衛門全集、第十一巻、昭和三年、798頁〕

11) 南懐仁『坤輿外紀』成立は1674年以降。〔足代弘道『説鈴』第十三冊、1－2頁〕

12) 同上。5－6頁。

13) Ktesias aus Knidos, ebd.

14) Aelianus, Claudius, ebd.

15) 楫取魚彦『喪志編』寛廷二年〔1749年〕〔『百家随筆』第三、84頁〕「インデア印度亞・印第亞　土產、獨角獸、比国深山の河水毒蟲多し、諸の獸敢て先に飲事なし、ウニカウル來て其の角を以て河水を攪まぜて飲て後、諸獸皆飲之とぞ」

16) 直海竜『廣大和（倭）本草』宝暦五年序〔1755年〕〔物集高見『広文庫』第三冊、大正五年、593頁〕

「兕犀、蠻語ウニカフルノ、爾雅釋獸云、兕似牛、犀似豕、郭璞注云、兕犀一角、是犀角中ノ絶佳ナルモノ、阿蘭蛇國欹奴蘇奴ガ傳ニ云ク、無灰酒中ニ浸スコト一宿、其酒水ニ變ズル者ヲ以テ眞物トス、凡犀ノ角ハ皆一角ナリ、兩角ノ者ハ犀ニアラズ」

17) 新井白蛾『牛馬問』宝暦六年刊〔1756年〕

18) 青木昆陽『昆陽漫録』宝暦十三年〔1756年〕〔『日本随筆大成』第十、昭和三年、564－565頁〕「阿蘭陀大譯今村源右衞門、阿蘭陀ノ諸書ヲ考ヘテ、一角ノ説ヲ著シ、一角獸ノ圖ヲノス。ソノ略ニ云ク、ハウルスヘネートスト云フ者ノ書ニ曰ク、韃靼ノガム　韃靼ニテ国王ノコトヲガムト云フ。一角獸ヲ畜フ。又ランフリイノ都ニテ、象ノ小キ程ナルヲミル、形、頭ベ平ク野猪ノ如ク、舌尖リ、釣針ノ如ク、眼ハ犀ニ似タリ。パウルスヨーヒユスガ云ク、一角獸ハ灰色小馬の如ク、頭ニ髪多ク覆ヒ、羊ノ如キ鬚アリテ、額ニ長サ二コビト今ノ曲尺三尺二寸餘。程ノ一角アリ。又ホノニイ　地ノ名。ノロウニウェ、イキデバルマートト云フ者ノ云ク、一角獸二疋メツカー　アラビヤ国ノ府ノ名。ケルク

阿蘭陀ニテ大家ヲケルークト云フ。ノ傍ノ厩ニ繋ギアリシヲ見タリ。大キナルハ三十月ヲ經タル馬ノ如ク、額ニ一角アリテ、長サ三アイラ　曲尺六尺八寸餘。小サキハ一年ヲ經タル駒ノ如クニシテ、一角ノ長サ手ヲ四束バカリ。〔割註〕阿蘭陀ノ尺二尺ノ積リ、阿蘭陀ハ手指ヲ以テ尺寸ノ名トス。」コノ獸ノ黒色ニテ頭ハ鹿ノ如ク、頸短ク毛髪少ク、髭短クカタカタヘタレ、足ヤセテ牝鹿ノ足ノ如シ。蹄ノサキ少シワレテ、羊ノ如ク、右ノ足ノ毛多シ。」　一角獸女児ヲ好ミ、香ヲ悦ブ。　イツノ頃ヨリカ、獸ノ角ニアラズ。北海ノ魚ノ一角ナリトモ云ヘリ。コノ説モ一定ナラザレバ信ズベカラズ。敦書アラハス所ノ和蘭櫻木一角獸説ノ如ク、山獸、海獸知ルベカラズトナス。ヨロシカルベシ。按ズルニ、此図阿蘭陀本草　阿蘭陀ニテ本草ヲ「コロイトブウク」ト云フ。ニアレドモ、山獸、海獸知ルベカラザレバ、是亦信ズベカラズ。」

19) 平沢元愷『瓊浦偶筆』安永三年刊〔1774年〕〔『俚言集覧』上巻による〕「印第亞地多毒蛇、泉水染其毒、人畜飲之即死、有獸名独角、毎日...」これは一字一句にいたるまで『喪志編』の記事を踏襲している。

20) 田螺金魚『契情買虎之巻』安永七年刊〔1778年〕〔『洒落本大成』第七巻、昭和五十五年、314頁〕「一角〔うにこうる〕の花器には梅と柳を折入る。」

21) 西村遠『居行子』後編二の八、安永八年〔1779年〕〔『広文庫』第三冊、大正五年、596頁〕は殆ど『采覧異言』を踏襲している。

22) 伊勢貞丈『安齋随筆』巻三十一、天明元年－3年〔1781－1783年〕〔増訂故実叢書『安齋随筆』下巻、昭和四年、291頁〕「消毒の薬のウニコウル　消毒の薬に用ふるウニコウルと云ふ物、本名はウンコウルなり、ウニコウルと云ふは訛なり、グルウンデアと云ふ国にある獸の角なり、采覧異言に曰く...」以下『采覧異言』の記事をそのまま踏襲している。

23) 大槻茂質（玄沢）『六物新誌』天明六年序、版〔1886年〕〔『六物新誌・稿／一角纂考・稿』宗田　一解説、昭和五十五年、54－55頁〕

24) 同上。50頁以下参照。

25) 木村孔恭『一角纂考』天明六年序〔1886年〕〔『六物新誌・稿／一角纂考・稿』宗田　一解説、昭和五十五年、179頁〕

26) 村瀬栲亭『秡苑日渉』文化四年版〔1807年〕〔『古事類苑』動物部、昭和四十五年、475頁〕「紅毛蠻互市貨物有烏爾鼓縷、此譯云、一角能解百毒、即獨角獸也、金鰲退食筆記、有獨角獸補子、南懐仁坤輿外記曰、印度國産獨角獸形大如馬極輕快毛色黄頭有角長四五尺其色明作飲器能解百毒其鋭能觸大獅若悞觸樹角不能出反為獅斃、又曰印第亜、其地多毒蛇泉水染其毒、人畜飲即死、有獸名獨角、毎日以角攪其水、人畜方敢飲、熙按、犀之類有一角者有二角者、一角者謂之兕犀或謂之獨角犀、正似今一角矣、本草網目曰、爾雅云...」

27) 栗原信充『柳葊随筆』文政三年〔1820年〕「一角　訓蒙圖會云、獬豸（カイチ）一角なり」玉海云、雍閏二年閏九月己亥坊州献□□獸、左右皆曰麟也云々、唐

興平二十年三月有一角獸、識者以為獬豸」魚譜云、一角魚と云は東洋にあり顱上に角あり長三尺許、これ薬に用ふる一角なり」

28) 武井周作『魚鑑』下の七、天保二年刊〔1831年〕〔生活の古典双書18、昭和五十三年、68－69頁〕

29) 大曲駒村『川柳大辞典』上巻、昭和三十年、216頁。

30) 喜多村信節『筠庭雑考』天保14年〔1843年〕〔『百家説林』続編下一、.471頁〕

31) 小野蘭山『本草綱目啓蒙』巻三十九、十八－十九、享和三年刊〔1803年〕〔杉本つとむ編『小野蘭山　本草綱目啓蒙――本文・研究・索引―』昭和四十九年、603頁〕

32) 和泉雅人、同上、特に、205頁以下参照。

本論文は平成二年度慶応義塾大学学事振興資金によって成ったものである。文献収集等に関しては三田情報センターの東田全義氏をはじめ多くの方々のお世話になった。また、特に本塾国文科の関場武教授には資料の検索から読解まで懇切に御指導いただいた。

末尾ではあるが心よりお礼を申し上げる。